

ゲルマン語強変化動詞第1種の歴史的変遷(2)⁶⁷

下 寄 正 利

2.5. ドイツ語

古高ドイツ語のī, ei, ē, iは、中高ドイツ語でもそのまま変わらない。従って、中高ドイツ語におけるアプラウトのパターンは、基本的に古高ドイツ語のそれと同様である。中高ドイツ語でī-ei-i-iというアプラウトを行う動詞には、次のものがある。

bīten, bīzen, blīchen, brīsen, brīden, tīchen, trīben, vlīzen, gīgen, glīen, glīten, glīmen, glīfen, glīzen, gnīten, grīnen, grīfen, līben (schonen), nīgen, -rīnen, kīnen, klīben, krīen, krīgen, krīsen⁶⁸, krīschen, krīzen, quīnen, līben (übrig bleiben), līchen (gefallen), -līmen, līden, mīden, nīden, phīfen, prīzen, rīten, rīsen, sīgen, sīfen, schīben, schīten, schīnen, schīzen, schīden, schrīen, schrīben, schrīten, slīten, slīchen, slīfen, slīzen, smīzen, snīden, splīzen, -sprīten, sprīzen, stīgen, strīten, strīchen, swīfen, swīgen, swīchen, swīmen, swīnen, wīgen (kämpfen)⁶⁹, wīchen, wīfen, wīsen (vermeiden), wīzen (vorwerfen), rīben, rīzen, rīden (drehen)

krīenは古フランス語からの、phīfenはラテン語からの借用語である。

古高ドイツ語で見られた動詞の内、-rīman, -wīzan (gehen), rīdan (wachsen)は姿を消している。過去分詞由来の形容詞wēsanも失われている。-rīhhanは弱変化へ移行している⁷⁰。-sprītenは、過去分詞の用例(underspriten)しか残されていない。

逆に、上であげた動詞の内、次のものは古高ドイツ語期の文献には見られず、中高ドイツ語期になって初めて文献に現れる。

brīsen, brīden, tīchen, gīgen, glīen, glīten, glīmen, glīfen, krīen, krīgen, krīsen, krīschen, krīzen, quīnen, -līmen, prīzen, sīfen, schīben, schīten, schīden, slīten, splīzen, sprīzen, swīfen, swīmen

⁶⁷ 「ゲルマン語強変化動詞第1種の歴史的変遷(1)」は、『山口大学独仏文学第41号』(2019)所収。

⁶⁸ krīsenには、強変化動詞第5種のkrēsenという別形が存在している。

⁶⁹ germ. *weihanからは、wīgen (kämpfen)とwīhen (schwächen)という2つの動詞が生じている。

⁷⁰ 古高ドイツ語の-rīhhanとrīhhenとrīhhēnがまとまって中高ドイツ語のrīchenになっている。

glienは、過去複数語幹において語幹末に-rが加えられる⁷¹。

古高ドイツ語期から存在はしていたが、弱変化から強変化へ移行しているものもある。lichenは古高ドイツ語では弱変化第3種(līhhēn), phifenは弱変化第2種(phīfōn), swīgenは弱変化第3種(swīgēn)である。līchenはまだ弱変化も示している。nīdenは、古高ドイツ語期、資料上の制約のため強変化か弱変化か判然としないが、中高ドイツ語期では、まれに弱変化形も見られるが、たいていは強変化である。

中高ドイツ語でî-ê-i-iというアブラウトを行う動詞には、次のものがある。rīhen (durch etw. Zusammenhaltendes verbinden, aufreihen)は、中高ドイツ語期になってから文献に見られるようになる動詞である⁷²。

līhen, rīhen, sīhen, spīen, zīhen, dīhen, wīhen (schwächen)

古高ドイツ語で見られた-rīhan (hüllen)とrīhan (winden)は姿を消している。snīwen < snīwanも、強変化形は命令法のsnīを残すのみで、弱変化へ移行している。

schrienとspīenは、すでに古高ドイツ語において、各語幹に様々な別形が存在していたが、中高ドイツ語では、次のような諸形態が見られる⁷³。

schrien/schrīgen/schrīn – schrei/schrê – schrim/schriuwen/schrūwen
– geschrim/geschriuwen/geschrūwen
spīen/spīwen – spê/spei – spiwen/spirn/spiuwen/spūwen
– gespiwen/gespirn/gespiuwen/gespūwen

spīenの過去単数語幹では、spēhという形態は見られなくなっている。schrienとspīenの間に相互に類推が働いたため、過去単数語幹においてschreiに倣ってspei, spêに倣ってschrêという形態が形成されている。古高ドイツ語では-rを伴った形態がskriānの過去複数形と過去分詞、spīwanの過去分詞で見られたが、中高ドイツ語では更にspīenの過去複数形にも現れている。過去複数語幹及び過去分詞の語幹では、語末子音がwの時、方言によりiに代わってiu, ûが現れ、

⁷¹ glienの過去分詞は残されていない。

⁷² 本稿では、Seebold (1970)に従い、この意味のrīhenの祖形を*reihanとしている。註29を参照のこと。

⁷³ schrienとspīenはこの他、弱変化も示している。またspīenにはspiuwen, spūwenという別形もある。

それにより *spien* の過去複数形に *spiuwen*, *spûwen*⁷⁴, 過去分詞に *gespiuwen*, *gespûwen* という別形が生じている。*schrien* の過去複数形の *schriuwen*, *schrûwen*, 過去分詞の *geschriuwen*, *geschrûwen* はこれらの形態への類推か、あるいは *spien* への類推で *w* が語幹末に付加され、その後同様の音変化が起き形成されたものと考えられる。

schrei と *schrê*, *spê* と *spei* のような過去単数語幹における母音の揺れは、*glîen*, *lîhan*, *dîhan* においても見ることができる。*glîen* においては本来の *ei* と並んで *ê* が、*lîhan* と *dîhan* においては本来の *ê* と並んで *ei* が用いられている。

文法的交替に関しては、*brîden*, *lîden*, *mîden*, *nîden*, *snîden*, *riden* が *d* ~ *t*, *lîhen*, *rîhen*, *sîhen*, *zîhen*, *dîhen*, *wîhen* が *h* ~ *g*, *rîsen* が *s* ~ *r* という交替を示しているが、それぞれ *d*, *h*, *s* の方への平均化が見られる。この文法的交替の平均化は、地域による差が大きい。*brîsen*, *krisen*, *schîden*, *wîsen* では文法的交替は見られない。*lîhen* の過去分詞には *geligen*, *gelîhen* と並んで、*h* ~ *w* という交替を示す *geliuwen* という形も見られる。*w* の前の *iu* に関しては、上記を参照のこと。

初期新高ドイツ語期になると、音韻的にも形態的にも大きな変化が生じる。中高ドイツ語の *ê* はそのまま *e* [e:] として保持されるが、*i* と *ei* は共に [ai] になる。中高ドイツ語の短母音は閉音節では短母音のまま保持されるが、開音節では長母音化する⁷⁵。ただし、短母音の開音節での長母音化にはかなり例外があり、特に後続子音が *t* の時は長母音化が起こらないことが多く、強変化動詞第1種の過去複数語幹と過去分詞の語幹では、*t* の前の *i* は一貫して長母音化せず短母音のまま保持される⁷⁶。

過去単数語幹の幹母音 *ei* [ai] と *e* [e:] は、すでに中高ドイツ語において分布に揺れが生じていたが、初期新高ドイツ語ではすべて *ei* で統一する方向へ向かっていく。この変化に加え、過去単数語幹と過去複数語幹の統合が起こってくる。過去単数語幹が用いられていたところで過去複数語幹が用いられったり、逆に過去複数語幹が用いられていたところで過去単数語幹が用いられったりするようになるが、最終的には過去複数語幹が統一過去語幹として残る。これは、現在語幹と過去語幹が同一になることを避けたためである⁷⁷。

⁷⁴ 古高ドイツ語では、*spîwan* の過去複数形に *spuum* という別形が見られたが、この形態の幹母音の長短は実ははっきりしていない。もし短母音だったとすると、この形態は中高ドイツ語では消失したことになる。もし長母音だったとすると、*spûwen* との関連が問題となってこよう。

⁷⁵ この変化の後、二重子音の単純子音化が起こる。

⁷⁶ Reichmann/Wegera (1993), §L34 及び Paul (²³1989), §45 を参照のこと。なお、逆に中高ドイツ語の短母音が開音節で長母音化することがあるが、これについては Reichmann/Wegera (1993) の同箇所及び Paul (²³1989), §46 を参照のこと。

⁷⁷ 現代ドイツ語では、すべての動詞で現在形と過去形の形態が異なる。

これらの変化の結果、語幹が高地ドイツ語子音推移により生じた無声摩擦音あるいはtに終わる場合は、ei [ai] – i [i] – [ɪ], それ以外の場合はei [ai] – ie [i:] – ie [i:]というアプラウトを行うようになり⁷⁸、これはほとんどそのまま現在まで続いている。

現代ドイツ語でei – i – i, ei – ie – ieというアプラウトを行う動詞は、それぞれ次の通りである。

ei – i – i

beißen, befleißén, gleiten, greifen, kneifen, kneipen, gleichen, leiden, pfeifen, reiten, schießen, schreiten, schleichen, schleifen, schleißén, schmeißén, schneiden, spleißén, streiten, streichen, weichen, reißen

ei – ie – ie

treiben, bleiben, leihen, meiden, preisen, scheiden, scheinen, schreien, schreiben, speien, steigen, schweigen, zeihen, gedeihen, weisen, reiben

schreienとspeienは、古高ドイツ語期より各語幹に様々な別形が存在していたが、最終的には、共時的に見て変則的な形態が排除され、過去形と過去分詞の幹母音はieのみとなり、語幹形態はすべて幹母音で終わり後ろに子音を伴わない形態にそろえられた⁷⁹。leihenも過去形と過去分詞の幹母音はieのみとなった。

中高ドイツ語で強変化動詞第1種として現れている動詞の内、次のものは失われている。

bîten, brîsen, brîden, tîchen, glîen, glîmen, glîfen, gnîten, lîben (schonen), -rînen, kînen, klîben, krîen, krîgen, krîsen, quînen, lîchen (gefallen), -lîmen, prîzen, rîsen, sîgen, sîfen, schîten, schîden, slîten, sprîten, sprîzen, swîchen, swîmen, swînen, wîgen⁸⁰, wîhen, wîsen (vermeiden), wîzen (vorwerfen), rîden

次の動詞は、中高ドイツ語では強変化第1種であるが、現代ドイツ語では弱変化へと移行している。

⁷⁸ ただし、kneipenと後述のkeifen, kreischen（註81を参照のこと）のアプラウトはei [ai] – i [i] – [ɪ]である。

⁷⁹ ただし、バイエルン・オーストリア方言では、標準語のspeienに対し、wから変化したbを語幹末に伴うspeibenが用いられる。

⁸⁰ 現在分詞由来の名詞Weigandも一旦失われるが、後に復活している。

bleichen, geigen, gleißen, greinen, neigen, kreischen⁸¹, kreißen, neiden, reihen, seihen, schweifen, weifen

中高ドイツ語においてすでにほとんど弱変化になっていたschneienも、現代標準ドイツ語では完全に弱変化である⁸²。

scheiben, schleißenは、中高ドイツ語では常に強変化であるが、現代ドイツ語では強変化形と弱変化形が併存している。scheibenはまたアブラウトも特殊で、scheiben – schob – geschobenと変化する。これはschiebenと混同され、過去形と過去分詞の幹母音がschiebenのそれに置き換わってしまったことによる。gleiten, scheinen, zeihenも、かつて一時期弱変化形が併存していたことがあるが、現在では弱変化形は失われている⁸³。

中高ドイツ語期に存在していた強変化動詞第1種の中の多くが、失われたり弱変化へ移行している一方で、数は多くないが、初期新高ドイツ語期以降に新たに強変化動詞第1種に加わった動詞が存在する。

keifenは中高ドイツ語期中低ドイツ語から借用された動詞である⁸⁴。中高ドイツ語では、明確に強変化と言える形態は残されていないが、後の時代になると強変化と弱変化の両方を示すようになる。現在では強変化形は古形となっている。

同じく中低ドイツ語からkneipenが初期新高ドイツ語期に借用されている。kneipenが借用された後、これを高地ドイツ語的な形にしたkneifenが新たに形成され、広く用いられるようになり、kneipenを方言的語彙に押しやってしまう。kneifenは常に強変化であるが、kneipenは強変化と弱変化が併存している。

中高ドイツ語のgeflichen, prisen, wisenは弱変化であるが、強変化へと移行している(gleichen, preisen, weisen)⁸⁵。prisen (> preisen)は古フランス語からの借用語である。

scheidenは強変化動詞第7種であったが、第1種へと移行している。

文法的交替に関しては、ほとんどの動詞が現在語幹の子音に統一する形で捨て去ってしまっており、現在見られるのはleidenとschneidenのみである。

⁸¹ 方言によっては強変化形も存在する(kreischen – krisch – gekrischen)。schの前では短母音の長母音化は起こらない。Reichmann/Wegera (1993), §L34, Anm.3 及び Paul (231989), §45を参照のこと。

⁸² 方言によっては強変化を示している。

⁸³ ただしscheinenは、方言によっては弱変化形が残っている。

⁸⁴ 中高ドイツ語には、中低ドイツ語kivenを借用したkivenと並んで、高地ドイツ語本来のkibenが存在していた。

⁸⁵ この他、speisenやfreien等も強変化することがあった。Paul (1968 [1917]), §181, Anm.4 及び Reichmann/Wegera (1993), §M112, Anm.1を参照のこと。

2.6. 低地ドイツ語

本稿では中低ドイツ語については専ら北部低地ドイツ語方言を、新低ドイツ語についてはその中の北低地ザクセン方言を扱うこととする。

中低ドイツ語では、古ザクセン語の \bar{e} (<germ. ai) は、i-ウムラウトをしていない場合、[e:] または [ɛ:] になる。開音節における古ザクセン語の i は [æ:] になる。本稿では以降、中低ドイツ語の [e:] 及び [ɛ:] は \hat{e} , [æ:] は \bar{e} と記すこととする。これらの音変化により、中低ドイツ語の強変化動詞第1種のアプラウトは $\hat{i}-\hat{e}-\bar{e}-\bar{e}$ となる。なお、直説法現在2人称・3人称単数形では、語尾の母音が脱落した場合、子音群の前で幹母音の短母音化 ($\hat{i} > i$) が起こる。中低ドイツ語で $\hat{i}-\hat{e}-\bar{e}-\bar{e}$ というアプラウトを示す動詞には、次のものがある。

bîten, drîven, vlîen, vlîten, gînen, glîden, gnîden, grînen, grîpen, nîgen, -rîten, kîven, kîken, klîven, knîpen, krîgen, krîten, blîven, lîen, lîden, miden, pîpen, rîden, rîen, rîsen, sîgen, schînen, schîten, schrîen, schrîven, slîken, slîten, smîten, snîden, spîwen, splîten, stîgen, strîden, strîken, swîgen, swîken, tîen, twîden, dîen, wîgen⁸⁶, wîken, wîten (vorwerfen), wrîven, wrîten

古ザクセン語に見られた動詞の内、bîdan, blîkan, glîtan, -hlîdan, hnîtan, hrînan, scîthan, skrîdan, -wîtan (gehen) は失われている。kînan は弱変化へ移行している⁸⁷。

逆に次にあげる動詞は、中低ドイツ語期になってから強変化動詞第1種として文献に出現するようになっている。

gînen, gnîden, grînen, kîven, kîken, knîpen, krîgen, krîten, pîpen, rîen, schîten, slîken, splîten, strîden, strîken, swîgen, twîden, wrîven

pîpen はラテン語からの借用語で、本来弱変化である。swîgen も弱変化第2種から強変化第1種に移行している。

中低ドイツ語に見られる強変化動詞第1種の内、次のものは弱変化も示している。

⁸⁶ wîgen は、Lübben (1989 [1888]) には記載されているが、Lübben (1970 [1882]) にも Lasch (1974) にも見られない。

⁸⁷ Lübben (1970 [1882]), 76 頁では kînen は強変化動詞第1種としてあげられているのに対し、Lübben (1989 [1888]), 173 頁では kînen は kîmen という別形とともに弱変化動詞とされている。本稿では後者に従った。なお現在は、kînen は失われ、kiemen (<kîmen) の方が残されている。

vlien, vliten, kiven, kiken, krigen, miden, pipen, rien, schinen, schrien, striden, tien, twiden

krigen は更に、強変化動詞第2種の変化も示している。

文法的交替に関しては、中低ドイツ語では古ザクセン語の th が d になるので、古ザクセン語においてはまだ見られた th ~ d という交替が見られなくなっている。risen も文法的交替は示していない。中低ドイツ語で見られる文法的交替は、vlien, lien, rien, tien, dien における 0 ~ g という交替のみである⁸⁸。古ザクセン語の lihan は、h ~ w という交替を示していたが、中低ドイツ語では vlien, rien, tien, dien への類推により、0 ~ g という交替に置き換わっている。

vlien, lien, rien, tien, dien の過去単数語幹は、文法的交替の平均化により、ch < g で終わる。germ. h は中低ドイツ語において長母音の後の語末では消失するので⁸⁹、この ch が germ. h を継承するものではないことは明らかである。

語幹が母音で終わる vlien, lien, rien, schrien, spien, tien, dien の現在語幹においては、母音間で生じた渡り音に由来する g を語幹末に持つ別形が形成される⁹⁰。vlien, lien, rien, tien, dien では、文法的交替の平均化もこの g を伴う形態の形成に関与していたものと考えられる。

schrien と spien は、不定詞と強変化直説法過去単数形が次のようになる⁹¹。

schrîen/schrîgen – schrê/schrach
spîwen/spîen/spîgen – spêch

schrê は母音で終わっているが、spêch では ch < g が語幹末に入り込んでいる。schrach という強変化動詞第5種の形態は、schrîgen の直説法現在2人称・3人称単数形 (schrîchst, schrîcht) から類推的に形成されたものであろう。spîwen の w の脱落については、w はすでに古ザクセン語において、母音間にあり後続母音が u, o の時脱落しており⁹²、更に中低ドイツ語期になると、語中で子音の前にある時も脱落するようになり⁹³、そうして生じた w の無い形態が類推的に広がったものと考えられる。

新低ドイツ語では、中低ドイツ語の ê は ee/e [ei] に、ē は e [e:] あるいは ä [e:] になる。wicken 以外の動詞では、元の過去単数語幹が統一された過去語幹とな

⁸⁸ 中低ドイツ語では、母音間の h は脱落する。Lasch (²1974), §226 及び §350 を参照のこと。

⁸⁹ 同書 §351 を参照のこと。

⁹⁰ 同書 §425, Anm.1 を参照のこと。

⁹¹ 過去複数形と過去分詞は、用例が残されていない。

⁹² Gallée (³1993), §188 を参照のこと。

⁹³ Lasch (²1974), §301, 1 を参照のこと。

る⁹⁴。この変化により、wieken以外の動詞のアプラウトは、ie – ee/e [ei] – e [e:]/ä [ɛ:]となる。このパターンのアプラウトを示す動詞は、次のものである⁹⁵。

bieten, drieven, glieden, griepen, kieken, kniepen, kriegen, blieven, glieken, lieden, miegen, rieden, schieten, schrien/schriegen, schrieven, slieken, sliepen, slieten, smieten, snieden, spien/spiegen, splieten, stiegen, strieden, strieken, swiegen, diehen/diegen, rieven, rieten

wiekenは、次のような変化をする。

wieken – week/wiek – weken/(wäken)/wieken – weken/(wäken)/wickt

中低ドイツ語で見られた動詞の内、次のものは見られなくなっている。

vlïen/vlïgen, vlïten, gïnen, nïgen, -rïten, klïven, kriten, lïen, mïden, rïen/rïgen, sïgen, schïnen, swïken, tïen/tïgen, twïden, wïgen, wïten (vorwerfen)

次の動詞は、弱変化へと移行している。

gnieden, grienen, kieven, piepen, riesen, schienen

nïgen, lïenは、同一語根を持つ弱変化動詞negen, verlehnenに取って代わられている。

kieken, spien, diehen, wiekenは、強変化動詞第1種として残ってはいるが、過

⁹⁴ 過去単数語幹と過去複数語幹の融合については方言差が見られ、方言によっては過去単数語幹と過去複数語幹がいまだに区別されており、過去分詞の語幹の幹母音と同じ母音が過去複数語幹で用いられている。たとえばミュンスターラント方言では、glicen (gleiten) と grienen (weinen) 以外の強変化動詞第1種は、過去単数語幹の母音が ee, 過去複数語幹と過去分詞の語幹の母音が ie である。glicen と grienen では、過去単数語幹と過去複数語幹が統合され、過去単数語幹の幹母音であった ee が統合された過去形の幹母音となっている。Lindow u.a. (1998), 120-121 頁を参照のこと。

⁹⁵ 同書 87 頁では、新低ドイツ語の強変化動詞第1種のアプラウトには、ie – ee/e – e/ä, ie – ee/e – ie, ie – ee/e – e の3通りがあり、ie – ee/e – e/ä というアプラウトを行う動詞は bieten, drieven, griepen, kriegen, blieven, lieden, schriegen, schrieven, sliepen, slieten, smieten, snieden, splieten, stiegen, swiegen, rieven, ie – ee/e – ie というアプラウトを行う動詞は glieden の1語、ie – ee/e – e というアプラウトを行う動詞は kieken, kniepen, glieken, miegen, rieden, schieten, slieken, spie(ge)n, strieden, strieken, rieten とされている。

去分詞に弱変化形が併存している。

強変化動詞第1種から消えた動詞がある一方、新低ドイツ語期になってから強変化動詞第1種として文献に登場するようになった動詞もある。glicken, miegen, sliepenがこれに当たる。

schrienとspienには、同根で同義の弱変化動詞schreen, speenが存在している。どちらも弱変化過去形を持たず、schrien, spienの過去形が用いられる。

文法的交替の痕跡は、diehen/diegenという二重形態において見られるのみとなっている。起源的にはVernerの法則によるものではないが、0～gという交替は、schrien/schiegen, spien/spiegenという二重形態においても見ることができる。

中低ドイツで見られた直説法現在2人称・3人称単数形での幹母音の短母音化は、新低ドイツ語にも引き継がれている。この短母音化は、語幹が母音で終わるschrien, spien, diehenでは起こらない。短母音化が起こるのは、語幹が子音で終わる動詞のみである。splietenでは、短母音が現在語幹から形成される他の変化形にも入り込み、splittenという別形が形成されている。語幹が子音で終わる動詞の内、次の動詞では直説法現在2人称・3人称単数形において短母音を伴った形態と長母音を伴った形態の両方が見られる⁹⁶。

kieken, kniepen, glicken, sliken, sliepen, spiegen, strieken

2.7. オランダ語

中期オランダ語では、germ. aiは、口の開きの狭いēまたはeiへと変化している⁹⁷。強変化動詞第1種の過去単数語幹では常にēが現れる。中期オランダ語では開音節における短母音の長母音化が起こるが、その際germ. iは舌の位置が下がり、口の開きの広いǣとなる⁹⁸。これらの変化により、中期オランダ語に

⁹⁶ spiegenの場合、長母音が見られるのは3人称単数形のみである。なお、本稿の記述は、SASS Plattdeutsches Wörterbuch (2009)に基づいている。直説法2人称・3人称単数形において短母音と長母音の両方を示している動詞については、文献によりあげている動詞に違いが見られ、SASS Plattdeutsche Grammatik (2011), 108-136頁ではkiekenとstriekenの2語のみとされている。Lindow u.a. (1998), 87頁では、ie – ee/e – eというアプラウトを行う動詞すべてが短母音を伴った形態と長母音を伴った形態の両方を持つとされている。

⁹⁷ Goosens (1974)は、germ. aiがaiとaeに割れ、aiがei、aeがēに発展したとしている (31頁, 36-37頁)。

⁹⁸ ēとǣの違いは、開口度の違いではなく、前者が二重母音[eə]で後者が単純長母音[e:]であったという説もある。Goosens (1974), 40頁及びvan Kerckvoorde (1993), 7頁を参照のこと。

おける強変化動詞第1種のアブラウトは、ī-ē-æ-æとなる⁹⁹。

中期オランダ語でこのパターンのアブラウトを示すのは、次の動詞である。

biden, biten, bliken, driven, drijschen, driten, dwinen, finen, vliten, gliden, grinen, gripen, grisen, beliden (bekennen), nighen, gherinen¹⁰⁰, riten, kiven, kiken, cliven, nipen, crighen, crijschen, criten, quiten, bliven, gheliken, liden (leiden), miden, beniden, pipen, prisen, riden, riën, risen, sighen, siën, versiken, sipen, scinen, sciten, scriven, scriden, slipen, sliten, smiten, sniden, spliten, stighen, striden, striken, swighen, beswiken, verswinen, tiën, trinen, diën, wiken, wisen, witen, writen

bliven と liden は過去分詞で ghe- が付かない。finen と pipen はラテン語からの、quiten と prisen は古フランス語からの借用語である。

次の動詞には、弱変化形も見られる。

bliken, dwinen, finen, vliten, nighen, kiven, quiten, miden, beniden, riën, siën, scinen, stighen, striden, tiën, diën, wiken, wisen, wriven

siën はたいてい弱変化である。finen, quiten, gheliken, prisen, wisen は本来弱変化だったのが強変化へ移行したものである。beliden も元は弱変化で、beliën という形をしていた。pipen も本来弱変化であったと考えられるが、弱変化形が残されていない。

wigen は、中期オランダ語では弱変化である。

文法的交替は、riën, siën, tiën, diën において¹⁰¹, ch (<germ. h) ~ gh (<germ. g) という交替が見られる。

scriën¹⁰² と spiën は、中期オランダ語でも特殊な変化形を示している。

scriën – scre/scrau – scrouwen – (用例無し)

spiën/spuwen/spouwen – speu/spau/spooch/speech

– spuwen/spouwen/spoghen/spiwen

– ghespuwen/ghespouwen/ghespoghen/ghespeghen

⁹⁹ 古期オランダ語ではまだ germ. i の開音節における長母音化と舌の位置の低下が起こっていないので、アブラウトのパターンはī-ē-i-iである。

¹⁰⁰ 単純語の rinen は弱変化動詞である。

¹⁰¹ germ. h は古期オランダ語において、母音間にある時脱落した。Goossens (1974), 68 頁を参照のこと。

¹⁰² scriën はほとんど用いられず、代わりに弱変化の screien が用いられていた。

īの後にwが続くと、īがū [y:]またはouに変化するか、あるいはīが保持されwが脱落する¹⁰³。ūとouの違いは方言的なものである。この変化により、spi-, spuw-, spouw-という3種類の現在語幹が形成される。なお、spuwen, spouwenは弱変化もする。iの後にwが続く時も、iはiuを経てū [y:]またはouに変化する¹⁰⁴。この変化により、過去複数形のspuwen, spouwenという形態、過去分詞のghespuwen, ghespouwenという形態が生まれる。過去単数形のspeech, 過去分詞のghespeghenはriën等に対する類推による¹⁰⁵。speech, ghespeghenという語幹がch, ghに終わる形態が形成された後、更に現在語幹の幹母音ūが誘因となり強変化動詞第2種への類推が働いたことで、語幹がch, ghに終わり強変化動詞第2種の幹母音を持つ形態、すなわち過去単数形のspooch, 過去複数形のspoghen, 過去分詞のghespoghenが形成される。過去単数形のspauは、強変化動詞第2種で語幹がwに終わるbluwen/blouwen等に対する類推による¹⁰⁶。scriënの過去単数形のscrauと過去複数形scrouwenは、spiënに対する類推による。

新オランダ語では、中期オランダ語のīはij [ɛi]に、ēとæは融合しe, ee [e:]になる。ēとæの融合により、過去単数語幹と過去複数語幹の区別は失われる。これらの変化により、新オランダ語の強変化動詞第1種のアプラウトは、現在語幹、過去語幹、過去分詞の語幹の順にij [ɛi] – e, ee [e:] – e [e:]となる。

現在、強変化動詞第1種に属す動詞には、次のものがある。

bijten, blijken, breien, drijven, verdwijnen, vrijen, glijden, grijpen, hijsen¹⁰⁷, belijden (bekennen), nijgen, rijten, kijven, kijken, (k)nijpen, krijgen, krijten, kwijten, blijven, gelijken, lijden (leiden), mijden, pijpen, prijzen, rijden, rijgen, rijzen, zeiken, zijgen, uitscheiden, schijnen, schijten, schrijven, schrijden, slijpen, slijten, smijten, snijden, spijten, splijten, stijven, stijgen, strijden, strijken, zwijgen, bezwijken, wijzen, wijken, wijten, wrijven

中期オランダ語のsighenとsiënは融合し、zijgenにまとめられている。

¹⁰³ Franck (1883), 50頁を参照のこと。

¹⁰⁴ Franck (1883), 50頁, 100頁及びGoosens (1974), 45頁, 50-51頁を参照のこと。過去複数形のspiwenではiがū/ouにもæにもなっていないが、これはFranck (1883), 100頁でもその可能性があげられているが、方言的なものであろう。

¹⁰⁵ de Vries (1987), 687頁, spuwenの項目を参照のこと。Franck (1883)は、ch, ghは渡り音として発生したjが発展したものと考えている(100頁)。

¹⁰⁶ bluwen/blouwenは、bluwen/blouwen – blau – bluwen/blouwen – gebluwen/geblouwenという変化をする。同じ変化をする動詞には他にbruwen/brouwenとruwen/rouwenがある。

¹⁰⁷ 厳密には、hijsenは初出が1461年で、中期オランダ語の末期であるが、上記において中期オランダ語期に見られる強変化動詞第1種としてあげずにおいている。

現代語では、アクセントの無い接頭辞を伴わない限り、すべての動詞の過去分詞にge-が付く。

中期オランダ語で見られた動詞の内、次のものは姿を消している。

biden, driten, drijschen, finen, vliten, grinen, grisen, gherinen, cliven, crijschen, versiken, sipen, scriën¹⁰⁸, verswinen, trinen, diën

benijdenは完全に弱変化になっている。

中期オランダ語のspiënは様々な別形を有していたが、新オランダ語ではそこからspuwenとspugenという2つの同義の動詞が形成されるに至っている。spuwenは弱変化である。spugenは弱変化もしくは強変化第2種の変化(spugen – spoog – gespogen)をする。中期オランダ語には見られなかったgを伴う現在語幹は、過去形のspoog, 過去分詞のgespogenから類推的に形成されたものである。

breien, vrijen, zeiken, spijten, stijvenは、元は弱変化動詞である。breienとzeikenは綴りからも本来的な強変化動詞第1種ではないことは明らかである。breien, vrijen, zeiken, stijvenは弱変化と強変化の両方を示している。もっとも、breienの強変化形は方言的なもので、vrijenの強変化形はくだけた文体での使用に限られている。

uitscheidenは本来強変化動詞第7種であるが、„aufhören“の意味の時は強変化動詞第1種の変化をする¹⁰⁹。ただし、この動詞の過去形と過去分詞は、くだけた文体でしか用いられない。

文法的交替は、語形変化系列内では全く見られなくなっている。中期オランダ語のriën/righenとsiënとtiënは、語幹末子音がg < germ. gの方で統一され、rijgen, zijgen(上記参照のこと)、tijgenとなっている。なお、tijgenは中期オランダ語の強変化動詞第1種のtiënと強変化動詞第2種のtienが融合した動詞であり、不定詞のtijgenはtiënを引き継いでいるが、過去形と過去分詞はそれぞれtienの過去形と過去分詞を引き継ぐtoog, getogenとなっている。意味はtienの意味である。ただし、分離動詞のaantijgenにおいては、まだtiënの意味が残っている。なお、betijenでは、語幹末が0 < germ. hの形が保持されているが、この動詞はlaten betijenという形でしか用いられない。

¹⁰⁸ 現在、scriënが表わしていた意味を表わす動詞は弱変化のschreeuwenである。中期オランダ語でscriënに代わって用いられていたscreienから来ているschreienは、意味領域が縮小し、„weinen“の意味に限定されている。

¹⁰⁹ „ausscheiden“の意味で用いたときは、scheidenと同様、過去形が弱変化で、過去分詞が強変化動詞第7種の形である。

2.8. 英語

中英語において、古英語の *ā* (< germ. *ai*) は、北部ではそのまま保持されるが、南部では *ǣ* になる。南部ではこの音変化によりアプラウトのパターンが *ī-ǣ-i* - *i* となる。北部では早くに過去複数形でも過去単数語幹の *ā* が用いられるようになり、アプラウトは *ī-ā-ā-i* となる¹¹⁰。15世紀になると大母音推移が始まるが、これにより *ī* は /ai/ に、*ǣ* は /ou/ になる。中英語において強変化動詞第1種に属す動詞は、次の通りである。

*bīden, bīten, bliken, drīven, drīten, dwīnen, fīnen, flīten, glīden, gnīden, grīpen, -grīsen, rīnen (berühren), whīnen, chīnen*¹¹¹, *-līven, līðen, mīzen, mīðen, nīpen, rīnen (regnen), rīden, rīven, rīpen*¹¹², *rīsen, sīen (sinken, fallen), sīen (seihen), sīken*¹¹³, *shīnen, shīten, schrīven, slīven, slīden, slīten, smīten, snīken, snīðen, stīen, strīden, strīken, strīven, swīven, swīken, swīðen (brennen), þrīven, þwīten, wīken, wīten (gehen), wīten (vorwerfen), wlīten, wrēon, wrīten, wrīðen (winden)*

古英語に見られた強変化動詞第1種の内、次のものは中英語で見られなくなっている。

fīgan, frīnan, gīnan, hlīdan, hnīgan, hnītan, -clīfan, -cwīnan, lēon, scrīþan, -swīþan (stärken), þīnan, þwīnan, wrīþan (wrīdan)

tēon と *þēon* は中英語では強変化動詞第2種である。共に中英語期に消失する。germ. **weihan* は、古英語では現在分詞由来の *wīgand* が残されていたが、中英語ではこれも失われる。

mīzen, sīen, stīen, wrēon においては、強変化第1種の変化形と強変化第2種の変化形が混在している。*stīen* は弱変化も示している。強変化形と弱変化形が混在している動詞はかなり多く、*stīen* の他、以下の動詞があげられる。

dwīnen, fīnen, flītan, glīden, gnīdan, grīpen, -grīsen, chīnen, līpen, rīnen, rīsen, sīken, schīnen, slīten, smīten, stīen, swīven, swīken, þwīten, -wīten, wīten, wrīten, wrīpen

¹¹⁰ 主として中英語北部方言において、開音節の *i* は *ē* [e:] に変化する。そのため、幹母音が *i* の過去分詞と並んで幹母音が *ē* の過去分詞が見られることがある。

¹¹¹ *chīnen* は、すべての変化形で語頭音が *ch* に統一されている。

¹¹² *rīpen* の別形 *rēpen* (< 古英語 *reopan*) は、強変化動詞第4種と第5種の変化、及び弱変化をする。

¹¹³ *sīken* はわずかに過去単数形に強変化形を残すのみで、ほとんど弱変化へ移行している。

spīwenは完全に弱変化に移行している。

finen, rīven, strīven, swīden (brennen), þrīvenは、中英語期になってから文献に現れる動詞で、どれも借用語である。rīven, swīden, þrīvenは古ノルド語から、finenとstrīvenは古フランス語から借用されたものである。

中英語においては、過去分詞の接尾辞-enの脱落が見られるようになる。-enの脱落が起こるかどうかにについては、時期的、地域的、音環境的な違いがある。

文法的交替はwrēonにおいてしか見られない¹¹⁴。この動詞は古英語においてすでに文法的交替の平均化によりwrīganという別形を生じていたが、この別形は中英語でもwrīenという形態で継承されている。

中英語に見られた強変化動詞第1種の内、現在まで残っているものはわずかである。次の動詞は、あるものはすでに中英語期に、あるものは近代英語期に入ってから消失している。

bliken, drīten, dwīnen, finen, flīten, gnīden, -grīsen, rīnen, whīnen, chīnen, -līven, līþen, mīzen, mīþen, nīpen, rīnen, rīpen, sīen (sinken, fallen), sīen (seihen), sīken, schrīven, slīven, slīten, snīken, snīþen, stīen, swīven, swīken, swīþen, þwīten, wīken, -wīten (gehen), wīten (vorwerfen), wlīten, wrēon

現在まだ残っているのは、次にあげる語である。

bide, bite, drive, glide, gripe, ride, rive, rise, shine, shit, slide, smite, stride, strike, strive, thrive, write, writhe

この内、glide, gripe, writheは完全に弱変化（規則変化）となっている¹¹⁵。現在、不規則な変化をしているのは次にあげる語のみである。

bide, bite, drive, ride, rive, rise, shine, shit, slide, smite, stride, strike, strive, thrive, write

なお、bideとabide、strideとbestrideには変化の違いが見られるので、以降それぞれ別の動詞として扱うことにする。

過去分詞の-enは、過去形の幹母音と過去分詞の幹母音が異なる場合には付き、同じ場合には付かない。ただし、語幹が/d/、/t/に終わる動詞では、若干例

¹¹⁴ tēonとþēonは強変化動詞第2種に移行しているため、除外して考えている。

¹¹⁵ glideは、近代英語期に入ってから18世紀までglide – glid – glidという変化も示していた。gripeは、中英語の末期にはすでに弱変化に移行している。

外が見られる。

次の動詞は、過去単数語幹の幹母音が過去形の幹母音となったため、/ai/ - /ou/ - /i/ というアプラウトになっている。

bide, drive, ride, rive, rise, smite, stride, bestride, strive, thrive, write

bide, rive, thriveは弱変化（規則変化）もする。bideの過去分詞は、弱変化形（規則変化形）しかない¹¹⁶。riveの過去形は弱変化形（規則変化形）が普通で、roveはまれである。このように弱変化形（規則変化形）を併せ持つ強変化動詞がある一方、アメリカ英語では弱変化動詞（規則変化動詞）のdiveが、このグループへの類推で、doveという過去形を持つに至っている。/ai/ - /ou/ - /i/ というアプラウトを行い語幹が/d/、/t/に終わる動詞の過去分詞は、弱変化形（規則変化形）しか持たないbideを除き、-enに終わるが、かつては-enの無い形態が併存していた。

abideとshineは、上記のグループの動詞と同様、過去単数語幹の幹母音が過去形の幹母音となるが、本来の過去分詞に代わって、過去形が過去分詞としても用いられるようになり、/ai/ - /ou/ - /ou/ というアプラウトを示している¹¹⁷。abideには本来の過去分詞のabiddenも残されているが、使用はまれである。なお、abideもshineも弱変化形（規則変化形）が併存している。過去分詞の幹母音が/ou/の動詞は現在ではabideとshineのみであるが、かつてはdrive, ride, smite, bestrideの過去分詞にも幹母音が/ou/の別形があった。

biteとslideは/ai/ - /i/ - /i/と幹母音に変化する。biteの過去分詞は普通bittenだが、bitという別形もある。slideの過去分詞はslidだが、かつてはsliddenという形態も存在していた。ただし、backslideの場合は、現在でもbackslidという過去分詞とbacksliddenという過去分詞が共に用いられている。幹母音が/i/の過去形は、bestrideにも別形として存在しており、またかつてはride, smite, writeにおいても見られた。幹母音が/i/の過去形を持つ、あるいは持っていた動詞は、すべて語幹が歯茎閉鎖音に終わっているが、このことは、過去形の幹母音が/i/になったのには、幹母音が/ai/ - /i/ - /i/と変化し語幹が歯茎閉鎖音で終わる弱変化動詞¹¹⁸の存在が深く関わっていることを明確に示している¹¹⁹。恐

¹¹⁶ bideにはかつてbidという過去分詞が存在していたので、このグループに分類している。

¹¹⁷ イギリス英語では、shineの過去形と過去分詞で/ou/に代わって/o/が用いられる。

¹¹⁸ chideとhideの2語がこれに当たる。

¹¹⁹ chideとhideが一方向的に語幹が歯茎閉鎖音に終わる強変化動詞第1種に影響を及ぼしていたのではなく、両者は互いに影響を与え合っており、強変化動詞第1種からの影響で、chide, hideの過去分詞にchidden, hiddenという-enに終わる形態が形成されている。

らく、元々過去複数語幹の幹母音として /i/ が用いられていたところに、そのようなタイプの弱変化動詞の影響が加わり、過去形の幹母音が /i/ になったのであろう¹²⁰。

shit も過去形の幹母音が /i/ であるが、shit の場合、hit 等の現在形、過去形、過去分詞の幹母音がすべて /i/ である弱変化動詞への類推が働き、現在形の幹母音も /i となっている。

strike は /ai/ - /ʌ/ - /ʌ/ というアプラウトを示すが、これは stick¹²¹ に対する類推によるものと考え得られる。なお、本来の過去分詞 stricken は意味が特殊化し、形容詞として用いられている。

文法的交替に関しては、中英語においてかろうじてそれを示していた wrēon が消失してしまったため、全く見られなくなっている。

2. 9. 西フリジア語

古フリジア語においては、テーマ母音の脱落した直説法現在2人称・3人称単数形における幹母音 *i* と、現在語幹を持つその他の形態における幹母音 *ī* の交替が見られたが、近代西フリジア語ではこの交替は失われる¹²²。

古フリジア語の *ī* は、近代西フリジア語では、無声子音、鼻音、*l*、次音節に属する有声閉鎖音の前で短母音化し、[i] となる。ゲルマン祖語の *ai* から発展した過去単数語幹の *ē* [e:] は、*ie* [iə] となる。古フリジア語の開音節における *i* は [i] となる¹²³。過去語幹は、単数語幹の方で統一される。これらの変化の結果、語幹が母音、*k*、*w* で終わるものを除いた残りの動詞の内の多くが、*i* [i] - *ie* [iə] - *i* [i] というアプラウトを示すようになる。具体的には次の動詞である。

bite, ite, belide, krite, skite, slite, smite, spite, splite, wite, write

belide 以外、語幹が無声閉鎖音の *t* で終わっている動詞である。現在語幹の幹母音が [i] となったため、ite は他の動詞と全く同じ変化となっている。

belide は、古フリジア語の形が *bihlīa* であり、語幹末に *d* を生じている。belide は、現在単数形及び命令形の幹母音が *ii* [i:] である。これは、古フリジア語において見られた *i* と *ī* の交替が平均化され、現在語幹を持つすべての形態の幹母音が *ī* になった後、*d* が幹母音と同一音節に属す形態で *ī* の短母音化が起

¹²⁰ Brunner (1951) は、/i/ という幹母音を持つ過去形を弱変化形としており、かつての過去複数形を継承したものである可能性を否定している (193頁)。

¹²¹ stick は本来弱変化動詞第2種 (古英語 *stician*) であり、/i/ - /ʌ/ - /ʌ/ というアプラウトは、*sting* に対する類推による。

¹²² *lije* における古形の残存については、註128を参照のこと。

¹²³ Hoekstra (2001), 722-726頁を参照のこと。

こらず、そのまま残されたためであろう¹²⁴。

beswikeとwikeも本来このグループに属していたが、過去形には強変化形と弱変化第1種の形が併存しており、過去分詞は強変化形が姿を消し、弱変化第1種の形のみが用いられている。

blikeとgripeは*i [i] - ie [iə] - e [e:]*とアプラウトする。過去分詞の*e [e:]*の起源は不明である。古フリジア語において、過去複数語幹と過去分詞の語幹で*i*と並んで*e*が現れることがあったが、古フリジア語の*e*は開音節にあっても無声閉鎖音の前では近代西フリジア語で長母音化しなかったと考えられるため¹²⁵、古フリジア語の*e*と結びつけるのは無理であろう。なお、blikeもgripeも、弱変化第1種の変化が併存している。

strideは現在語幹と過去分詞の語幹の幹母音が長く、*i [i:] - ie [iə] - i [i:]*というアプラウトを示している。現在語幹の*i [i:]*は、単数形および命令形の幹母音で統一された結果であろう。過去分詞の語幹の*i [i:]*は、*i [i] - ie [iə] - i [i]*というパターンのアプラウトに倣い、現在語幹の幹母音と過去分詞の幹母音を同一にしたことによるものと考えられる。

glideとrideは、現在語幹の幹母音と過去分詞の幹母音の長短に揺れが見られ、*i [i(:)] - ie [iə] - i [i(:)]*というアプラウトをする。現在単数形及び命令形では、幹母音は短母音の*y [i]*である。knipeでも、現在語幹において幹母音の長短に揺れが見られる。pの前でなぜ長母音の*[i:]*が現れるのかは不明である。knipeは過去形に強変化形と弱変化第1種の形が併存しており、過去分詞は弱変化第1種の形のみが用いられる。現在単数形、命令形、弱変化過去形、過去分詞の幹母音はすべて短母音の*y [i]*である。

古フリジア語の*ī*は、語末及び母音の直前で*[ei]*になる¹²⁶。古フリジア語の*snītha*は*th*の脱落のため、近代西フリジア語では*snije - snie - sniene(n) - snien*という変化となっている。なお、*snije*は弱変化第1種の変化もする。

strikeは、*strike - striek/struts - strutsen*という変化をする。この過去形と過去分詞の幹母音以降の形は、*brekke, sprekke, stekke*等と共通している。

古西フリジア語において、語幹が*w (< v)*に終わっている場合、*-iuwa - -ēf/-iou - -iouwen - -iouwen*と変化した。近代西フリジア語ではこれが*-iuwe [ˌjýwə, ˌjówə] - -eau [ˌjóu, -óə] - -eauwen [ˌjówən]/-eaune(n) [-ôəna(n)] - -eaun*

¹²⁴ 現在語幹で*[i]*と*[i:]*が現れているのは、古フリジア語におけるテーマ母音の脱落した直説法現在2人称・3人称単数形の*i*と現在語幹を持つその他の形態の*ī*の交替を継承するものではないと考えられる。古フリジア語の開音節の*i*は、近代西フリジア語では*[i]*になるため、*[i]*と*[i:]*の交替という形にはならない。Hoekstra (2001), 722-723頁を参照のこと。

¹²⁵ 同書724頁を参照のこと。

¹²⁶ 同書725頁を参照のこと。

[-óən]となる。このパターンの変化をする動詞には、次のものがある。

driuwe, kliuwe, bliuwe, piuwe, priuwe, riuwe, skriuwe, triuwe, wiuwe, wriuwe

これらの動詞の過去形には、弱変化第1種の形が併存している。
古フリジア語で見られた動詞の内、次のものは失われている。

bīda, -drīta, -rīva, sīga, sīa, sīpa, skrīda, swīva

germ. *weihanは、これからの派生語も見られなくなっている。また次のものは強変化形を失い、完全に弱変化第1種へと移行している。

nige, mije, rize, skine, skreauwe, stige

lijeとspije¹²⁷も本来の強変化形を失い、弱変化第1種の変化をするに至っているが、それと並んで前者はlije – litte – lit¹²⁸、後者はspije – spei – speine(n) – speinという不規則的な変化形を併せ持っている。kwineは、弱変化第1種及び強変化第3種へ移行している。後者への移行は、nの直後のdが脱落したことにより¹²⁹、本来語幹が-ndで終わっていた強変化第3種の動詞とkwineが同じ語幹形態となったことによる。

失われた動詞や強変化第1種ではなくなった動詞がある一方、近代西フリジア語期になってから文献に現れるようになった強変化第1種の動詞や、本来弱変化だったが強変化第1種の変化形を併せ持つようになった動詞がある¹³⁰。これには次のものがある。

knipe, krite, lykje, piuwe, priuwe, riuwe, spite, triuwe, wiuwe, wriuwe

knipeは、オランダ語もしくは低地ドイツ語からの借用語と考えられる。lykjeは弱変化第2種であるが、類推により過去形にliekという強変化の形が併存している。

¹²⁷ spijeにはspuieという別形がある。

¹²⁸ lijeの現在2人称・3人称にはlijst, lijtという形の他、litst, litという古形が保持されている。過去形のlitte、過去分詞のlitはこのlitst, litから類推的に形成されたものと考えられる。

¹²⁹ Hoekstra (2001), 729頁を参照のこと。

¹³⁰ 弱変化第1種及び強変化第3種へ移行したkwineも、近代西フリジア語になってから見られるようになる動詞である。

強変化動詞第1種で、文法的交替を示す動詞は1つも無くなっている。

3. 最後に

最後に、全体的なことにつきいくつか触れ、本稿を終わりとしたい。

強変化第1種に由来する変化を示す動詞の総数は、現在、アイスランド語、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語の bokmål、低地ドイツ語、西フリジア語で30語前後、ノルウェー語の nynorsk、ドイツ語、オランダ語ではそれよりも多く、オランダ語は最多の50語を数える。一方、英語は非常に少なく、多めに数えても15語程度となっている。

総語彙数の変動について見てみると、言語により差が見られ、ノルウェー語の nynorsk は例外的に数が増えているが、その他の言語では数が減っている¹³¹。総数の減っている言語には、減り幅の小さいものと大きいものがある。減り幅の小さい言語の場合、アイスランド語のように変動そのものが小さいものもあれば、西フリジア語のように失われた動詞や他の語形変化クラスに移行した動詞も多いが、新たに加わった動詞も多く、結果的に総数が大きく変わっていない言語もある。強変化第1種に由来する変化を示す動詞の総数を大きく減らしているのがドイツ語と低地ドイツ語と英語である。ドイツ語では古高ドイツ語期に60語弱、中高ドイツ語期にはそれが更に増加し80語の動詞が見られるが、現代ドイツ語ではそれが半数以下に減少している。低地ドイツ語では古ザクセン語で40語、中低ドイツでは50語弱の動詞が見られるが、現在は30語にまで減少している。もっとも、減ったとはいえ、元が多かったためドイツ語の語数はゲルマン語の中で多い方であるし、低地ドイツ語もほぼ平均的な数である。英語は、語彙数の減少が最も大きな言語である。古英語においては、文献時代初期では最多の65語もの動詞が見られ、中英語でも若干数を減らすものの50数語の動詞が残っているが、それが現在では、上述のような数に激減している。

強変化第1種に由来する変化を示す動詞が現在、形態論的な1つのグループとしての一体性を保持しているかについては、英語と西フリジア語以外は、程度の差はあるが、まだ保持していると見て差し支え無かろう。ドイツ語やデンマーク語等では2つの下位グループが形成されているが、ドイツ語の下位グループが音環境によりどちらになるか規定されるのに対し、デンマーク語等の場合は、音環境によりどちらのグループになるか決定することは、すべての動詞にはできなくなっている。

語形変化系列内での文法的交替は、ドイツ語の *leiden* と *schneiden* において見

¹³¹ 古アイスランド語と古ノルウェー語、古スウェーデン語と古デンマーク語は、強変化動詞第1種に属す動詞に大差がなかったと考えられるため、ノルウェー語は古アイスランド語と、デンマーク語は古スウェーデン語と比較して考えている。

られるのみとなっている。また、低地ドイツ語の *diehen/diegen* という二重形態においても、語形変化系列内での文法的交替の名残を見ることができる。

アイスランド語、フェーロー語、一部の低地ドイツ語方言を除き、過去単数語幹と過去複数語幹の融合が起こるが、その際、過去単数形の語幹が統一された過去語幹になった言語もあれば過去複数語幹が統一された過去語幹になった言語もあり、また音韻変化の結果、過去単数語幹の幹母音と過去複数語幹の幹母音が同音となり、両語幹が融合した言語もある。英語における過去形の幹母音 /i/ が強変化第1種の過去複数語幹の幹母音を継承するものならば、英語では動詞により過去形の幹母音として過去単数語幹の幹母音が残ったものと過去複数語幹の幹母音が残ったものがあるということになる。

語幹が母音で終わる **skreian* と語幹が *w* で終わる **speiwan* は、言語により変則的な変化形が生じることがあるが、そうした場合、変化形の整理が行われ、最終的に変則的な形態を含まない単純な変化パターンが形成されている。西フリジア語では、語幹が *w* に終わる動詞は、特別な1つの変化パターンを形成するに至っている。

強変化動詞第1種の語幹形成法と語彙の変遷は、言語により異なっており、その点では個別言語的・分散的な発展とすることができるが、言語接触による収束的発展を考慮しなければならないケースがある。まずあげられるのが、ノルウェー語の *bokmål* におけるデンマーク語の影響である。デンマーク語との間に差異はあるものの、*bokmål* が語幹形成においてデンマーク語に倣っていることは明白である。言語接触による言語変化としては語の借用もあげられる。その中でも特に目に付くのが、中低ドイツ語からスカンジナビアの北ゲルマン語への語彙の流入である。その中には、*blīven* のような非常に基礎的で重要な語も含まれている。また、ドイツ語とオランダ語を比較してみると、本来別の変化クラスに属していた *gleichen* と *gelijken*、*preisen* と *prijzen*、*weisen* と *wijzen* が共に強変化動詞第1種であり、更にドイツ語の *scheiden* が強変化動詞第1種で、オランダ語の *uitscheiden* も部分的に強変化第1種の変化を示す¹³²。ここには明らかに言語接触による影響が見て取れる。

「ゲルマン語強変化動詞第1種の歴史的変遷 (1)」への訂正

訂正前

訂正後

11 頁下から3行目

¹³² 低地ドイツ語の *glicken*、*priesen*、*wiesen*、*scheden*、西フリジア語の *lykje*、*priiz(g)je*、*wize*、*skiede* はどれも弱変化である。

-clīfan, cnīdan, -cwīnan	- clīfan, -cwīnan
14頁4行目	
…grīpa, hnīga, …	…grīpa, -hlīa, hnīga, …
14頁5行目	
…skīna, skrīa, …	…skīna, skīta, skrīa, …
16頁1行目	
…アイスランド語とフェーロー語のみである。	…アイスランド語とフェーロー語と一部の低地ドイツ語方言のみである。
17頁, 註48, 4行目	
…デンマーク語 drite, mige, sigē, förvita;	…デンマーク語 drite, mige, sigē;
23頁7行目	
bide, bita	bide, bite

参考文献

(Haugen (1974 [1965])とSASS Plattdeutsches Wörterbuch以外の現代語辞典は省略。)

- Allan, Robin, Philip Holmes and Tom Lundskær-Nielsen 1995: Danish, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable 2002: A history of the English language, fifth edition, London and New York, Routledge.
- Benecke, Georg Friedrich, Wilhelm Müller u. Friedrich Zarncke 1990: Mittelhochdeutsches Wörterbuch, 3 Bde., Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866, Stuttgart.
- Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller ¹¹1991: An Anglo-Saxon dictionary, Oxford University Press.
- Boutkan, Dirk and Sjoerd Michiel Siebinga 2005: Old Frisian etymological dictionary, Leiden.
- Braune, Wilhelm ¹⁵2004: Althochdeutsche Grammatik 1, Laut- und Formenlehre, bearb. von Ingo Reiffenstein, Tübingen.
- ²⁰2004: Gotische Grammatik, neu bearbeitet von Frank Heidermanns, Tübingen.
- Bremmer Jr., Rolf H. 2009: An introduction to Old Frisian, Amsterdam/Philadelphia.
- Brunner, Karl ³1965: Altenglische Grammatik, Tübingen.
- 2010 [1960]: Die englische Sprache, ihre geschichtliche Entwicklung, 1. Band, 2., überarbeitete Auflage, Tübingen.
- 1951: Die englische Sprache, ihre geschichtliche Entwicklung, 2. Band, Halle

- (Saale).
- 2018 [1967]: Abriß der mittenglischen Grammatik, 6., unveränderte Auflage, Tübingen.
- Burrow, J.A. and Thorlac Turville-Petre 2005: A book of Middle English, third edition, Blackwell publishing.
- Campbell, Alistair 2003 [³1968]: Old English grammar, Oxford.
- Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson 1993 [²1957]: An Icelandic-English dictionary, second edition with a supplement by William A. Craigie, Oxford.
- Cordes, Gerhard 1973: Altniederdeutsches Elementarbuch, mit einem Kapitel „Syntaktisches“ von Ferdinand Holthausen, Heidelberg.
- Cordes, Gerhard u. Dieter Möhn (Hrg.) 1983: Handbuch zur niederdeutschen Sprach- und Literaturwissenschaft, Berlin.
- Dammers, Ulf, Walter Hoffmann u. Hans-Joachim Solms 1998: Grammatik des Frühneuhochdeutschen, 4. Band, Heidelberg.
- Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, 33 Bde, Nachdruck der Erstausgabe, 1984 [1854-1984], München.
- Donaldson, Bruce 1997: Dutch, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
- Duden Bd. 7, das Herkunftswörterbuch, 5. neu bearbeitete Auflage, 2013 Berlin/Mannheim/Zürich.
- Einarsson, Stefán 1973: Icelandic, Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press.
- Feist, Sigmund ³1939: Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache, mit Einschluß des Krimgotischen und sonstiger zerstreuter Überreste des Gotischen, Leiden.
- Franck, Johannes 1883: Mittelniederländische Grammatik, Leipzig.
- Gallée, Johan Hendrik ³1993: Altsächsische Grammatik, Tübingen.
- Goossens, Jan 1974: Historische Phonologie des Niederländischen, Tübingen.
- Goossens, Jan (Hrg.) 1983: Niederdeutsch, Sprache und Literatur, eine Einführung, 2., verbesserte und um einen bibliographischen Nachtrag erweiterte Auflage, Neumünster.
- Grosse, Rudolf (Hrg.) 2007: Althochdeutsches Wörterbuch, Reprint der Bände I-IV, Berlin.
- Gutenbrunner, Siegfried 1951: Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen, Heidelberg.
- Haeseryn, W., K. Romijn, G. Geerts, J. de Rooij en M. C. van den Toorn 1997: Algemene nederlandse spraakkunst, Band 1, tweede, geheel herziene druk,

Groningen/Deurne.

- Hansen, Aage 1962: Den lydlige udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden 1, vokalismen, København.
- 1971: Den lydlige udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden 2, konsonantismen, København.
- Haugen, Einar 1974 [1965]: Norsk engelsk ordbok, nytt amerikansk opplag med tillegg og rettelser, University of Wisconsin press.
- 1982: Scandinavian language structures, a comparative historical survey, Tübingen.
- Heusler, Andreas ⁷1967: Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg.
- Hirt, Hermann 1931: Handbuch des Urgermanischen, Teil I, Laut- und Akzentlehre, Heidelberg.
- 1932: Handbuch des Urgermanischen, Teil II, Stammbildungs- und Flexionslehre, Heidelberg.
- Hoekstra, Jarich F. 2001: An outline history of West Frisian, in: Handbuch des Friesischen, herausgegeben von Horst Haider Munske, Tübingen.
- Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: Altfriesisches Handwörterbuch, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
- Holmes, Philip and Hans-Olav Enger 2018: Norwegian, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
- Holmes, Philip and Ian Hinchliffe 2003: Swedish, a comprehensive grammar, second edition, London and New York, Routledge.
- Holthausen, Ferdinand ³1974: Altenglisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg.
- Holthausen, Ferdinand u. Dietrich Hofmann 1985: Altfriesisches Wörterbuch, zweite, verbesserte Auflage, Heidelberg.
- van Kerckvoorde, Colette M. 1993: An introduction to Middle Dutch, Berlin/New York.
- Kluge, Friedrich ²⁴2002: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, bearbeitet von Elmar Seebold, Berlin/New York.
- Köbler, Gerhard 1989: Gotisches Wörterbuch, Leiden.
- 1993: Wörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes, Paderborn.
- König, Ekkehard and Johan van der Auwera (Ed.) 1994: The Germanic languages, London and New York, Routledge.
- Krahe, Hans ²1967: Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen, bearbeitet von Elmar Seebold, Heidelberg.
- ⁷1969a: Germanische Sprachwissenschaft I, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- ⁷1969b: Germanische Sprachwissenschaft II, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- Krause, Wolfgang ³1968: Handbuch des Gotischen, München.

- Kress, Bruno 1982: Isländische Grammatik, Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie (Lizenzausgabe des Max Hueber Verlages, München).
- Kurath, Hans et al. (ed.) ³1969-2001: Middle English dictionary, University of Michigan.
- Lasch, Agathe 1974: Mittelniederdeutsche Grammatik, 2., unveränderte Auflage, Tübingen.
- Lehmann, Winfred P. 1986: A Gothic etymological dictionary, Leiden.
- Lexer, Matthias 1992: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, 3 Bde., Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1872-1878, Stuttgart
- Lindow, Wolfgang, Dieter Möhn, Hermann Niebaum, Dieter Stellmacher, Hans Taubken u. Jan Wirrer 1998: Niederdeutsche Grammatik, Leer.
- Lübben, August 1970 [1882]: Mittelniederdeutsche Grammatik, Osnabrück.
- 1989 [1888]: Mittelniederdeutsches Handwörterbuch, nach dem Tode des Verfassers vollendet von Christoph Walther, Darmstadt.
- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson 2001: A guide to Old English, sixth edition, Blackwell Publishing.
- Mottausch, Karl-Heinz 1998: Die reduplizierenden Verben im Nord- und Westgermanischen, Versuch eines Raum-Zeitmodells, in: NOWELE 33, S. 43-91, John Benjamins Publishing Company.
- Mossé, Fernand 1969 [²1956]: Manuel de la langue gotique, Paris.
- 1991 [1952]: A handbook of Middle English, translated by James A. Walker, tenth printing, London.
- Noreen, Adolf 1904: Altnordische Grammatik II, altschwedische Grammatik, mit Einschluß des Altgutnischen, Halle.
- ⁵1970: Altnordische Grammatik I, Tübingen.
- The Oxford English dictionary, edited by James A.H. Murray et al., 12 vols. and suppl., 1978 [1933] Oxford.
- Paul, Hermann 1968 [1917], Deutsche Grammatik, Band II, Teil III, Tübingen.
- ²³1989: Mittelhochdeutsche Grammatik, neu bearbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse, Tübingen.
- Pétursson, Magnús 1978: Isländisch, Hamburg, Helmut Buske Verlag.
- Pfeifer, Wolfgang u.a. 1989: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen, Berlin.
- Popkema, Jan 2018: Grammatica Fries, tweede druk, Leeuwarden.
- Prokosch, Eduard 1939: A comparative Germanic grammar, Linguistic society of America.
- Ranke, Friedrich u. Dietrich Hofmann ⁴1979: Altnordisches Elementarbuch, Berlin/New York.

- Reichmann, Oskar und Klaus-Peter Wegera (Hrsg.) 1993: Frühneuhochdeutsche Grammatik von Robert Peter Ebert, Oskar Reichmann, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera, Tübingen.
- Ringe, Don 2006: From Proto-Indo-European to Proto-Germanic (A linguistic history of English, volume I), Oxford University Press.
- Ringe, Don and Ann Taylor 2014: The development of Old English (A linguistic history of English, volume II), Oxford University Press.
- SASS Plattdeutsche Grammatik, 2., verbesserte Auflage, herausgegeben von der Fehrs-Gilde, Gesellschaft für niederdeutsche Sprachpflege, Literatur und Sprachpolitik e.V., 2011 Neumünster.
- SASS Plattdeutsches Wörterbuch, 5., überarbeitete Auflage, herausgegeben von der Fehrs-Gilde, Gesellschaft für niederdeutsche Sprachpflege, Literatur und Sprachpolitik e.V., 2009 Neumünster.
- Schützeichel, Rudolf 2006: Althochdeutsches Wörterbuch, 6., Auflage, überarbeitet und um die Glossen erweitert, Tübingen.
- Seebold, Elmar 1970: Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben, The Hague.
- Sehr, Edward H. 1966: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.
- Seip, Didrik A. 2012 [1971]: Norwegische Sprachgeschichte, bearbeitet und erweitert von Laurits Saltveit, Berlin/New York.
- 清水 誠 2006: 西フリジア語文法, 北海道大学出版会.
- Siebs, Theodor 1901: Geschichte der friesischen Sprache, in: Grundriß der germanischen Philologie, herausgegeben von Hermann Paul, Bd.1, 2. Auflage, Straßburg.
- Sjölin, Bo 1969: Einführung in das Friesische, Stuttgart.
- Skautrup, Peter 1968 [1944]-1970: Det danske sprogs historie, 5 bind, Gyldendalske boghandel, Nordisk forlag.
- Splett, Jochen 1993: Althochdeutsches Wörterbuch, 2 Bde., Berlin/New York.
- Stratmann, Francis Henry 1951 [1891]: A Middle-English dictionary, a new edition, rearranged, revised, and enlarged by Henry Bradley, Oxford University Press, London.
- Streitberg, Wilhelm ⁴1974: Urgermanische Grammatik, Heidelberg.
- 2000a: Die gotische Bibel, Band 1, der gotische Text und seine griechische Vorlage, 7. Auflage, Heidelberg.
 - 2000b: Die gotische Bibel, Band 2, Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch, 6. Auflage, Heidelberg.

- de Tollenaere, Felicien and Randall L. Jones 1976: Word-indices and word-lists to the Gothic bible and minor fragments, Leiden.
- Verwijs, Eelco en Jakob Verdam 1885-1952: Middelnederlandsch woordenboek, 9 banden en 2 suppl., The Hague.
- de Vries, Jan 1977: *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*, Leiden.
- Wessén, Elias 2012 [1968]: *Die nordischen Sprachen, deutsche Fassung der swedischen Ausgabe von Suzanne Öhman*, Berlin.
- 2012 [1970]: *Schwedische Sprachgeschichte, Band 1, Laut- und Flexionslehre, deutsche Fassung der swedischen Ausgabe von Suzanne Öhman*, Berlin.
- Wright, Joseph 1981 [1910]: *Grammar of the Gothic language, second edition with a supplement to the grammar by O. L. Sayce*, Oxford University Press.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1984 [1925]: *Old English grammar, third edition*, Oxford University Press.